

小学生の体力向上が学校生活の充実に及ぼす影響に関する研究

林 園子

(平成 27 年 1 月 7 日査読受理日)

A Study on the Influence which the Improvement in Physical Strength in Schoolchildren have on School life

HAYASHI, Sonoko

(Accepted for publication 7 January 2015)

キーワード：体力, 学校生活, 運動意識

Key words : Physical Strength, School Life, Sport Consciousness

I. 研究の目的

小学生における基礎的な体力や運動能力は昭和 60 年頃をピークに長期的な低下傾向にあったことから、近年、子どもの体力の重要性に関する普及啓発や運動・スポーツに親しむ機会の提供など様々な取組みが行われている。その結果、文部科学省 (2012)²⁷⁾による「全国体力・運動能力・運動習慣等調査」において、小学生の体力・運動能力の状況は「横ばい」または「緩やかな上昇傾向」であると述べている。しかしながら、体力水準の高かった昭和 60 年代に比べると依然として低い水準にとどまっている。加藤ら (2005)¹⁾はその理由として、近年における利便性や快適性などの生活環境の変化における身体活動量の低下を挙げている。そして、この低下が中学や高校へ進むにつれ、「やる気」「元気」といった活力に対して無気力状態の生活へと導いていることも事実である。

実際に中学校や高校の学校生活では「不登校」「中途退学」が増加傾向にある。文部科学省 (2011)²⁴⁾は、不登校となる理由に「情緒的混乱」「人間関係の困難」「学業不振」を、中途退学となる理由に「学校生活への熱意の欠如」「授業への無興味」「人間関係の難しさ」「学校の雰囲気への嫌悪」など否定的な感情を抱いていることを挙げている。

林 (2013)¹⁵⁾の先行研究において、学校や日常生活など子どもにとって充実した日々の生活を送ることは身体活動量を増加させ、体力や運動能力の向上へのひとつの鍵となるとしている。幼いときから豊かな生活を送ることが将来の生き方において重要な意味をもつのではないと言える。しかしながら、実際に現段階で子どもたちがもつ体力や運動能力が学校や日常生活にどのような効果をもたらせて

ているのか具体的な実体を示す内容に関する先行研究は数少ない。

本研究では、小学生における「体力・運動能力」と日常生活の大部分を占める「学校生活」状況との関係に着目し、子どもたちの感じる「充実した学校生活」という実体的な要因を明らかにするとともに、小学生の体力や運動意識が学校生活の充実に及ぼす影響について検討をすることを目的とした。

II. 研究の方法

本研究の調査は、東京都杉並区に所在する小学校 1 校全児童 720 名を対象に実施した。調査内容について、「新体力テスト結果」及び「運動及び生活意識」「学校生活充実度」に関する内容について独自のアンケート調査を実施した。

「新体力テスト結果」は調査対象校による平成 25 年度に実施した結果である「新体力テスト総合評価」を使用した。

アンケート調査の主な内容について、「運動及び生活意識」は、運動意識において、文部科学省 (2012)²⁶⁾「全国体力・運動能力・運動習慣等調査」から「運動の好き嫌い」「運動の得意不得意」「運動意欲の有無」、生活意識において、小学生の日常の大部分を占める生活状況を把握するための基準となる「学校生活の好き嫌い」、学校において運動・スポーツに直接関わる「体育授業の好き嫌い」、生活習慣における運動生活に関する「遊び場所」の項目から設定した。

「学校生活充実度」において、先に述べた不登校及び中途退学の理由の要因を踏まえ、藤田ら (1999)¹⁷⁾は学校が楽しいと感じる理由として友人や教師などとの「人間関係」や学校における「勉強意欲」の良好な状態であること

表1 調査項目

1. 運動意識		
		1. 運動の好き嫌い 2. 運動の得意不得意 3. 運動意欲の有無 4. 体育授業の好き嫌い 5. 学校生活の好き嫌い 6. 遊び場所
2. 日常生活		
大項目	中項目	小項目
人間関係	対家族	6 家族の人とよく話す 10 休日は家族の人と外出をする 16 親に言われなくても自分から勉強をする
	対友人	5 友達と話したり楽しんだりする
	対教師	3 先生とよく話す 12 先生に頼まれたことを進んで行く 18 先生が話していたら静かにする
生活態度	食生活	4 毎日朝食を食べる 8 元気で毎日過ごそうとする 17 給食は全部食べるようにしている
	学習意欲	1 体育授業では積極的に身体を動かしている 11 勉強は大切だと思う 15 学校行事に積極的に参加する
余暇時間	休み時間	7 休み時間は外で遊ぶ 9 休み時間は友達と遊ぶ 14 休み時間を楽しむようにしている
	放課後	2 自分から進んでお手伝いをする 13 公園や児童館などに自分から遊びに行く

が重要であることを述べており、林（2013）¹⁵⁾はこれらの要因に加えて自分に与えられた拘束されない自由な時間を多く確保することが子どもにとって有意義な生活を送ることができ、かつ体力向上や運動意識への効果につながるとしている。これらから、「人間関係」「生活態度」「余暇時間」と3つのキーワードを基に質問項目を設定した。

アンケート調査期間は、2013年10～11月に行った。具体的なアンケート調査の概要は表1に示すとおりである。有効回答数は676名（99.4%）であった。

これらの調査内容から、体力・運動能力と学校生活状況との関係を明らかにするために、新体力テスト結果及びアンケート調査で収集されたデータから基本的特性、運動意識、運動生活の項目を中心に必要に応じて χ^2 検定を用いた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 小学生の運動に対する諸特性

(1) 新体力テスト総合評価状況

図1は、調査対象校における平成25年度に行われた新体力テストの総合評価を3段階で発達段階別に示したものである。全体において「AB群」35.6%（N=236）、「C群」36.0%（N=238）、「DE群」28.4%（N=188）と「AB群」「C

群」がほぼ同数であり、全体の約7割以上が標準以上の体力・運動能力をもっている結果となった。

発達段階別において、低学年では「AB群」35.7%（N=76）、「C群」32.9%（N=70）、「DE群」31.5%（N=67）と「AB群」が最も多かったものの各群ほぼ均等に分布していた。中学年では「AB群」39.1%（N=86）、「C群」36.4%（N=80）、「DE群」24.5%（N=54）と低学年と同様に「AB群」が最も多く、かつ、他学年より「DE群」が少ない結果となった。高学年では「AB群」32.3%（N=74）、「C群」38.4%（N=88）、「DE群」29.3%（N=67）と「C群」が最も多く、低学年について「DE群」が多い結果となった。

これらの結果から、各学年問わず全体的には標準的な体

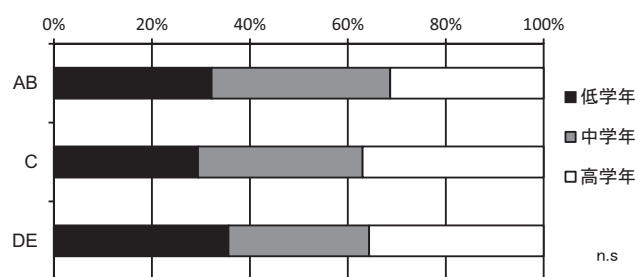


図1 発達段階別新体力テスト総合評価（3段階）

表2 調査対象者の運動及び生活意識

評価	AB n=236		C n=237		DE n=187		全体 n=660		χ^2 検定
	n	%	n	%	n	%	n	%	
運動の好き嫌い									
好き	195	82.6	150	63.3	106	56.7	451	68.3	$\chi^2 = 35.593$
嫌い	41	17.4	87	36.7	79	42.2	207	31.4	DF = 4
不明	0	0.0	0	0.0	2	1.1	2	0.3	P < 0.001
運動の得意不得意									
得意	201	85.2	147	62.0	82	43.9	430	65.2	$\chi^2 = 82.349$
不得意	34	14.4	89	37.6	105	56.1	228	34.5	DF = 4
不明	1	0.4	1	0.4	0	0.0	2	0.3	P < 0.001
運動意欲の有無									
もっとしたい	192	81.4	174	73.4	111	59.4	477	72.3	$\chi^2 = 28.001$
したくない	43	18.2	63	26.6	76	40.6	182	27.6	DF = 4
不明	1	0.4	0	0.0	0	0.0	1	0.1	P < 0.001
体育授業の好き嫌い									
好き	229	97.0	196	82.7	130	69.5	555	84.1	$\chi^2 = 59.147$
嫌い	7	3.0	41	17.3	57	30.5	105	15.9	DF = 2
不明	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	P < 0.001
学校生活の好き嫌い									
好き	212	89.8	211	89.0	160	85.6	583	88.3	$\chi^2 = 2.019$
嫌い	24	10.2	26	11.0	27	14.4	77	11.7	DF = 4
不明	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	n.s
遊び場所									
室内	154	65.3	133	56.1	91	48.7	378	57.3	$\chi^2 = 16.100$
屋外	81	34.3	104	43.9	92	49.2	277	42.0	DF = 4
不明	1	0.4	0	0.0	4	2.1	5	0.7	P < 0.05

力・運動能力をもつ者が多いとみることができる。

(2) 運動及び生活意識

表2は、調査対象者の運動及び学校・日常生活に対する意識状況を示している。はじめに、文部科学省においても調査されている項目である運動における「好き嫌い」「意欲の有無」「得意不得意」の3項目からみると、「好き嫌い」において、全体では「好き」68.3% (N=451) と約7割の者が運動を行うことに肯定的であった。総合評価別にみると、「AB群」82.6% (N=195), 「C群」63.3% (N=150), 「DE群」56.7% (N=106) と各群高い割合で肯定的ではあるものの、総合評価が低くなるにつれ否定的な回答が多い結果となった。この傾向は「意欲の有無」においても同様にみられた。

一方、「得意不得意」において、全体では「得意」65.2% (N=430) と「好き嫌い」「意欲の有無」と同様に約7割の者が肯定的であった。総合評価別にみると、「AB群」85.2% (N=201), 「C群」62.0% (N=147), 「DE群」43.9% (N=82) と「DE群」の半数以上の者が「不得意」と感じている結果となった。

次に、表2下3項目である学校及び日常生活における運動意識をみると、「体育授業の好き嫌い」において、全体では「好き」84.1% (N=555) と8割以上の者が体育授業を楽しんで活動している状況であった。総合評価別にみると、「AB群」97.0% (N=229), 「C群」82.7% (N=196), 「DE群」69.5% (N=130) と各群約7割以上の高い割合で意欲的に参加している状況であったが、総合評価が低くなるにつれ若干ではあるが徐々に体育授業に参加する意欲も低くなっていく傾向を示した。

「学校生活の好き嫌い」において、全体では「好き」88.3% (N=583) と約9割の者が学校生活を楽しく過ごしている状況であった。総合評価別にみると、「AB群」89.8% (N=212), 「C群」89.0% (N=211), 「DE群」85.6% (N=160) と総合評価の高低差に関係なく充実した学校生活を送っている状況であった。

「日常の遊び場所」において、全体では「屋外」57.3% (N=378), 「室内」42.0% (N=277) とやや「屋外」で遊ぶ者が多い状況であった。総合評価別にみると、「屋外」は「AB群」65.3% (N=154), 「C群」56.1% (N=133), 「DE

群」48.7% (N=91) であり、「DE 群」の過半数の者が「室内」で遊ぶ方が多い結果となった。

以上の意識調査の結果から、総合評価が高い者ほど運動意識は高く、日常生活においても学校及び学校外問わず、身体をよく動かす傾向がみられるため、学校及び日常生活を通して自然と身体を動かす機会を自らつくることに身についており、その生活状況が体力の評価結果に反映されているのではないかと考える。

(3) 学校生活充実度状況

図2, 図3, 図4は、「学校生活充実度」18項目を5段階評価で回答した結果を、総合評価3段階別にそれぞれの平均値を示したものである。各群においてT検定から有意差が認められ、かつ、「AB群」の回答平均値が高い(3.50以上)項目を取り上げた。

1つ目の大項目「人間関係」において、7項目中3項目が該当した。「5. 友達とよく話す」では「AB群」3.56, 「C群」3.62, 「DE群」3.43と3群中「C群」が友達とのコミュニケーションを意欲的にとる傾向が一番多くみられた。「6. 家族の人とよく話す」では「AB群」3.81, 「C群」3.79, 「DE群」3.68, 「10. 休日は家族の人と外出をする」では「AB群」3.59, 「C群」3.52, 「DE群」3.30と2つの家族関係項目から、総合評価が高い者ほど家族と会話や行動をよく行われているといえる。

これらの結果から、大項目「人間関係」において、総合評価が高い者ほど、家族と積極的にコミュニケーションをとることを心がける生活を送ることができており、親や兄弟姉妹との関係が良好であると考えられる。また、総合評価が標準より低い者は、自ら必要以上に身体を動かさない生活を送っている傾向がみられることから、遊んだり、外に出るなど身体を使って活動をするという機会や環境が少なかったり、それらが与えられていても億劫に感じている状況にあると考える。

2つ目の大項目「生活態度」において、6項目中4項目が該当した。「4. 毎日朝食をとる」では「AB群」3.83, 「C群」3.88, 「DE群」3.73と全体的に各群ともに高い値を示し、その中でも「C群」が一番高い値を示した。「8. 元気で毎日を過ごそうとしている」では「AB群」3.50, 「C群」3.23, 「DE群」3.05, 「1. 体育授業では積極的に身体を動かしている」では「AB群」3.67, 「C群」3.23, 「DE群」3.25, この2項目において「AB群」以外は、3.50以下の低い値を示した。「17. 給食は全部食べるようにしている」では「AB群」3.78, 「C群」3.67, 「DE群」3.57と全体的に各群ともに高い値を示し、その中でも「AB群」が一番高い値を示した。

これらの結果から、大項目「生活態度」において、「食事」に関して総合評価の高低差に関係なく日常生活に問題なく取り込まれているといえる。一方、「一日の行動意欲」に

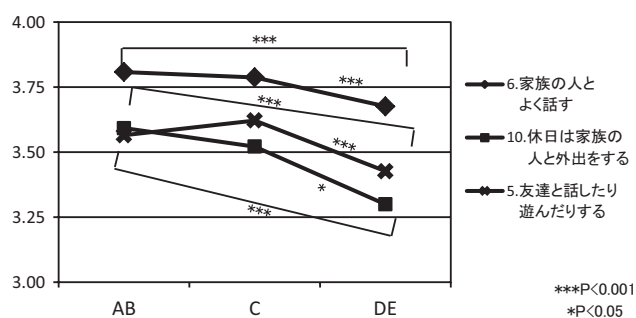


図2 学校生活充実状況 (大項目：人間関係)

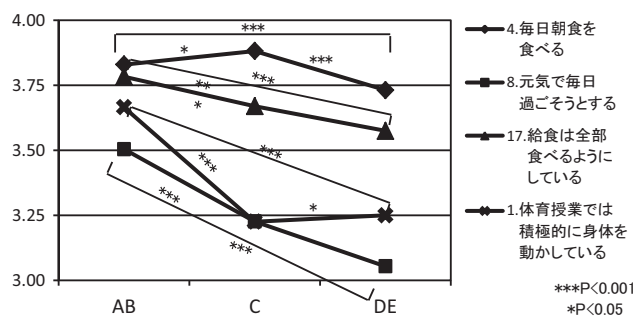


図3 学校生活充実状況 (大項目：生活態度)

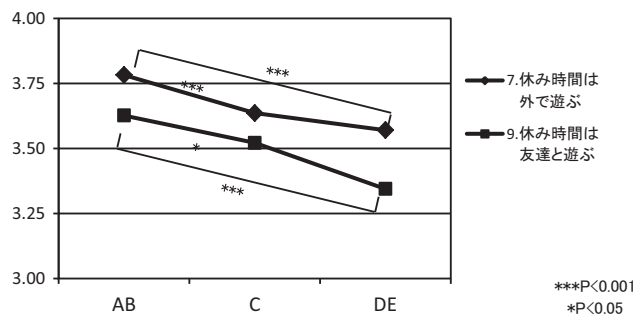


図4 学校生活充実状況 (大項目：余暇時間)

関して総合評価が低い者ほど楽しく明るくいきいきとした行動がともなっていない傾向がみられたことから、自由に身体を動かすための日常生活環境の乏しさや子ども自身が抱えている内面的な問題などが体力評価の結果につながっているのではないかと考える。また、体育授業における積極性において、体力・運動能力が標準である者の意欲が最も低かったため、子どもの興味・関心を引き立て、楽しさや喜び、「できる・わかる」などの達成感を味わうことのできる体育授業展開の工夫が、体力・運動能力を向上させるのみならず、子どもたちの活力ある生活を送るためのきっかけや身体を動かすための生活改善方法を示唆する場となるのではないかと考える。

3つ目の大項目「余暇時間」において、5項目中2項目が該当した。「7. 休み時間は外で遊ぶ」では「AB群」3.78, 「C群」3.64, 「DE群」3.57と全体的に各群ともに高い値を示し、その中でも「AB群」が一番高い値を示した。「9. 休み時間は友達と遊ぶ」では「AB群」3.63, 「C群」3.52,

表3 学校生活充実度の因子構造 (評価 AB)

変数	アイテム	寄与率	負荷量
第1因子 (F1) 楽しさ・喜び		20.976	0.84
5	友達と話したり楽しんだりする		0.83
12	先生に頼まれたことを進んで行く		0.77
14	休み時間を楽しむようにしている		0.50
第2因子 (F2) 積極性		7.046	
11	勉強は大切だと思う		0.62
15	学校行事に積極的に参加する		0.57
2	自分から進んでお手伝いをする		0.47
16	親に言われなくても自分から勉強をする		0.44
第3因子 (F3) 運動		4.638	
13	公園や児童館などに自分から遊びに行く		0.58
10	休日は家族の人と外出をする		0.44
1	体育授業では積極的に身体を動かしている		0.43
6	家族の人とよく話す		0.40
第4因子 (F4) 健康		3.676	
8	元気で毎日過ごそうとする		0.69
17	給食は全部食べるようにしている		0.60

表4 学校生活充実度の因子構造 (評価 DE)

変数	アイテム	寄与率	負荷量
第1因子 (F1) 元気		23.940	
8	元気で毎日過ごそうとする		0.74
15	学校行事に積極的に参加する		0.62
11	勉強は大切だと思う		0.45
17	給食は全部食べるようにしている		0.44
第2因子 (F2) 楽しさ・喜び		4.236	
5	友達と話したり楽しんだりする		0.75
12	先生に頼まれたことを進んで行く		0.64
4	毎日朝食を食べる		0.49
14	休み時間を楽しむようにしている		0.46
第3因子 (F3) 家族・先生との交流		3.973	
6	家族の人とよく話す		0.63
3	先生とよく話す		0.52
10	休日は家族の人と外出をする		0.42
第4因子 (F4) 行動選択		3.520	
16	親に言われなくても自分から勉強をする		0.59
13	公園や児童館などに自分から遊びに行く		0.54

「DE 群」3.34, と「AB 群」が一番高い値を示し、「DE 群」が 3.50 以下の低い値を示した。

これらの結果から、大項目「余暇時間」において、休み時間の過ごし方は総合評価が高い者ほど積極的に友達と共に関わり合いながら身体を動かすことができることから、ライフスタイルに合った身体を動かすことの楽しさや授業間という限られた自由な時間の中でも有意義に過ごすための方法を身につけているのではないかと考える。

2. 「学校生活充実度」の因子構造

表3, 表4は、「学校生活充実度」18項目の妥当性を検討すること及び調査対象者の潜在する構成概念を探るために因子分析を総合評価の高い「AB 群」と低い「DE 群」の2群別に行った。因子構造の分析結果、固有値の値が 1.00 以上 (第1因子～第5因子「AB 群」: 4.44, 1.17, 1.41, 1.32, 1.01, 0.90, 「DE 群」: 4.92, 1.36, 1.34, 1.25, 1.03, 0.95) を妥当な因子であると判断し、両群共に4因子を採用した。

「AB 群」において、第1因子の項目は、お手伝いをするなどで先生に褒められたり、友達と一緒に過ごすことで楽しいと感じるなど感情に関する内容から『楽しさ・喜び』、第2因子の項目は、子どもの本来の仕事である勉強や校内行事への取組み、お手伝いに対する意欲などに関する内容から『積極性』、第3因子の項目は、校内及び校外に関わらず自ら身体を動かす内容から『運動』、第4因子の項目は、自分の身体面及び精神面に関する内容から『健康』と命名した。

「DE 群」において、第1因子の項目は、学校生活を前

向きで意欲的に過ごすことに関する内容から『元気』、第2因子の項目は、「AB 群」の因子構造と同様、感情に関する内容から『楽しさ・喜び』、第3因子の項目は、会話や外出など人とのかかわりに関する内容から『家族・先生との交流』、第4因子の項目は、人の指図を受けずに自分から考え行動する内容から『行動選択』と命名した。

これらの2つの因子構造を比較すると、総合評価の高い者における因子は、小学生時期の成長過程と長い期間を通して伸ばしたり獲得をするために必要な内容が、低い者における因子は、一日や一週間と短い期間の生活に対して必要とされる内容がそれぞれまとめられた結果となった。

3. 発達段階と「学校生活充実度」因子の規定関係

調査対象者における発達段階別及び運動意識を規定する「学校生活充実度」を明らかにするために、「発達段階別」及び表1において総合評価の高低差で相違がみられた項目である「運動の得意不得意」をそれぞれ目的変数とし、「学校生活充実度」因子を説明変数として重回帰分析を行った。係数が正の場合、その因子に対して評価が高いと「学年が上がるほど意識が高い」「得意」など肯定的に感じる傾向にあり、その因子に対して評価が低いと「学年が上がるにつれ意識が低い」「不得意」など否定的に感じる傾向にあると解釈した。

(1) 総合評価 AB 群における規定力

図5において、総合評価が高い集団にみられる特徴的な規定力は、学校生活において学年が上がるにつれ「F3: 運動」($P < 0.001$)が高くなる一方、「F2: 積極性」($P <$

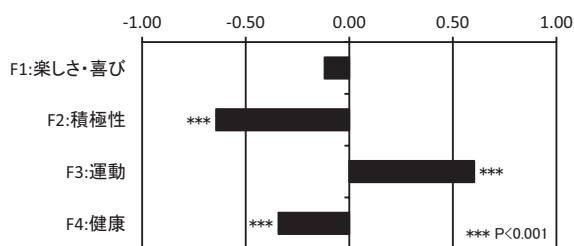


図5 発達段階における学校生活充実度因子の影響【評価AB】

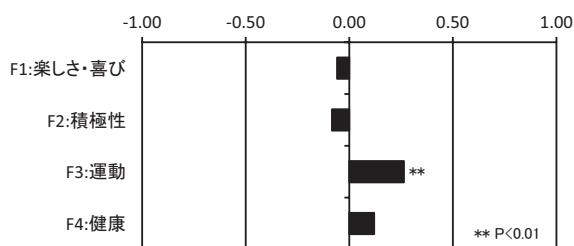


図6 「運動の得意不得意」における学校生活充実度因子の影響【評価AB】

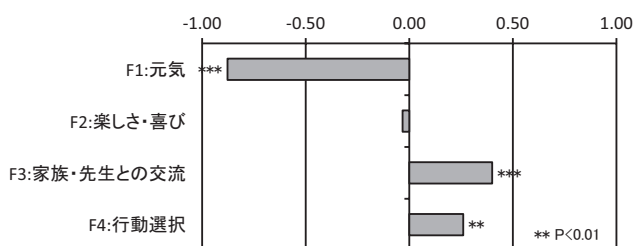


図7 発達段階における学校生活充実度因子の影響【評価DE】

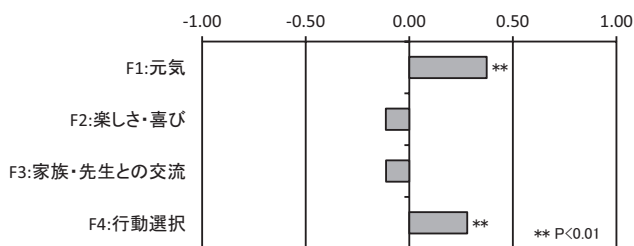


図8 「運動の得意不得意」における学校生活充実度因子の影響【評価DE】

0.001), 「F4:健康」(P<0.001)が低くなる傾向がみられた。また、図6において、図5の結果と同様に学校生活において「F3:運動」(P<0.001)の意識が高いと運動を「得意」と感じる傾向がみられた。

これら結果から、思春期を迎え心身ともに著しい成長を遂げている時期となる中で、体力・運動能力が高い者は発達段階が進むにつれ、体育授業や遊び、おけいこ事などを通して運動経験を重ねることで、運動することの楽しさや喜びなどを知り、自分にとって運動が日常生活に必要なものであることを感じている傾向が伺える。しかしながら、周囲の目を気にして行動をしたり、頑張ることや真面目に

物事に取り組むことに恥ずかしさを覚えたりする時期でもあるため、学校及び日常生活において、人と比べたり比べられることで一喜一憂することなく自分の潜在能力を遺憾なく発揮することのできる環境を整備することが、さらなる体力・運動能力を向上させるための条件になるのではないかと考える。

(2) DE群における規定力

図7において、総合評価が低い集団にみられる特徴的な規定力は、学校生活において学年が上がるにつれ「F3:家族・先生との交流」(P<0.001)及び「F4:行動選択」(P<0.01)が高くなる一方、「F1:元気」(P<0.001)が著しく低くなる傾向がみられた。また、図8において、学校生活において「F1:元気」(P<0.01),「F4:行動選択」(P<0.01)が高いと運動を「得意」と感じる傾向がみられた。

これらの結果より、体力・運動能力が低い者は、なによりも元気で活力のある生活を送ることが最も必要といえる。ひとりひとりが生きる原動力となる目標をもって生活し、自立することができるよう家族や教師の助言や励ましなどのバックアップ体制を整える必要があると考える。

IV. 結論

本研究では、小学生における「体力・運動能力」との関連から、「学校生活充実度」の実体的な構造を検討するとともに、小学生の体力や運動意識が学校生活の充実に及ぼす影響について検討をした。結果は以下のように要約される。

1. 小学生における「学校生活充実度」が構造化された。

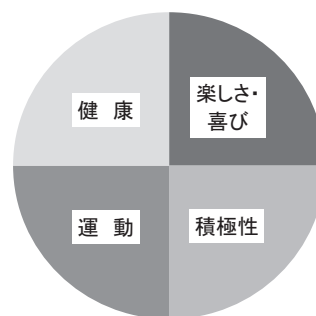


図9 学校充実度構造 (体力の高い者)

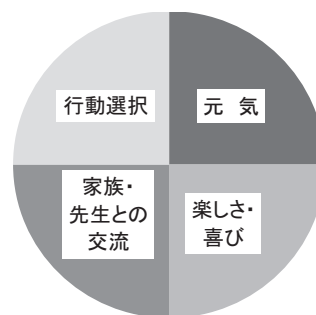


図10 学校充実度構造 (体力の低い者)

すなわち、体力の高い者の充実は、「楽しさ・喜び」「積極性」「運動」「健康」、体力の低い者の充実は、「元気」「楽しさ・喜び」「家族・先生との交流」「行動選択」から構成されており、各体力・運動能力のレベルに相応しい学校生活を送るための具体的要素が明らかとなった。(図 10, 図 11)

2. 「体力・運動能力」と「学校生活充実度」の相互関係が明らかとなった。また、子どもたちのよりよい学校生活を送るために体力や運動意識を向上させるための重要なポイントが示唆された。すなわち、もともと体力や運動能力の高い者は、身体を動かす機会を増やすことが重要である。また、体力や運動能力が低い者は、何事に対してもその日の気分で行動をするのではなく、前向きな生活を送るための行動選択ができることが重要である。

今後は本研究で得られた結果をもとに、子どもの体力向上に向けてさらに視野を広くし、個々に体力及び運動能力の違いがあっても、それぞれのレベルにおける充実した学校生活を送るための環境整備の具体化や体力向上の実践的な方法の追究が必要であると考えます。

V. 参考文献

- 1) 加藤華奈子, 石井好二郎, 大島秀武 (2005) 歩数計を用いた児童身体活動増加への試み, 体力科学第 54 巻第 4 号, 日本体力医学会, p.337-342.
- 2) 小林寛道 (2007) 子どもの体力低下と子供を元気にする環境, 月刊学術の動向 2007 1 月号, 日本学術協力財団, p.44-47.
- 3) 下坂剛 (2001) 青年期の各学校段階における無気力感の検討, 教育心理学研究第 49 巻第 3 号, p.305-313.
- 4) 津川恵子, 長升登志江, 坂口守男, 他 (2008) 中学生における生活習慣に関する調査研究—腹囲, 肥満度, 体脂肪率等との関連性について—, 大阪教育大学紀要第 III 部門第 56 巻第 2 号, p.9-45.
- 5) 小林秀昭, 小澤治夫, 樽谷将志 (2006) 児童の体格・体力と生活状況との関連, 北海道教育大学釧路校研究紀要第 38 号, p.113-118.
- 6) 東京都教育委員会子供の体力向上推進本部 (2010) 総合的な子どもの基礎体力向上方策 第 1 次推進計画, 東京都教育庁指導部指導企画課.
- 7) 東京都教育委員会 (2011) 平成 23 年度児童・生徒の日常生活活動に関する調査.
- 8) 中村和彦 (2009) 子どもの体力低下から見えてくるもの, 体力科学第 58 巻, 日本体力医学会, p.12.
- 9) 波多野義郎 (1979) 現代っ子はどれだけ動いているか, 体育科教育, Vol.27, 29-31.
- 10) 林園子, 畑攻, 前田佳奈他 (2007) 子どもの基礎基本運動の習熟と生活習慣・運動習慣・意欲に関する研究, 日本体育学会第 58 回大会予稿集, p.242.
- 11) 林園子, 畑攻, 池田延行, 他 (2009) 小学校における体力の向上及び運動習慣の形成と基礎基本運動の習熟に関する研究, 日本女子体育大学紀要第 39 巻, p.35-45.
- 12) 林園子, 畑攻, 池田延行, 他 (2010) 小学校における基礎基本運動の習熟状況とスポーツ特性に関する研究, 日本女子体育大学紀要第 40 巻, p.33-43.
- 13) 林園子 (2011) 中学生における運動・スポーツ活動が日常生活の充実度に与える司教に関する研究, 東京家政大学研究紀要第 52 集 (1), p.47-54.
- 14) 林園子, 池田延行, 田川絵梨, 他 (2011) 中学生の日常生活におけるスポーツの機能とマネジメントに関する研究, 日本体育学会第 62 回大会予稿集, p.166.
- 15) 林園子 (2013) 高校生の体育授業と運動・スポーツの意識に関する研究, 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 Vol.31, P57-65.
- 16) 林園子 (2013) 高校生における充実した日常生活を送るための効果的な体育授業に関する研究, 法政大学スポーツ健康学研究紀要 Vol.4, P29-38.
- 17) 藤田正, 西川潔 (1999) 他者からの受容感と学校が楽しい理由について, 奈良教育大学教育研究所紀要 Vol.35, P95-102.
- 18) ベネッセ教育研究センター (2007) 調査データクリップ! 子どもと教育.
- 19) ベネッセ教育研究センター (2007) 第 4 回学習基本調査報告書.
- 20) ベネッセ教育研究センター (2009) 放課後の生活時間調査—子どもたちの時間の使い方 [意識と実態] —.
- 21) 宮下和, 本山貢他 (2010) 小学生の生活習慣が体力に及ぼす影響, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要第 20 巻, p.125-131.
- 22) 文部科学省 (2009) 学校基本調査.
- 23) 文部科学省 (2010) スポーツ振興基本計画.
- 24) 文部科学省 (2011) 平成 22 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査.
- 25) 文部科学省 (2011) 小学校学習指導要領解説.
- 26) 文部科学省 (2012) 文部科学省白書, P263-267.
- 27) 文部科学省 (2012) 平成 23 年度全国体力・運動能力・運動習慣調査報告書.

Abstract

This research examines the substantive structure of “The degree of fulfillment school life” via the relationship with the “Physical strength and Athletic ability” of schoolchildren.

The results and conclusion were summarized as follows;

- (1) Schoolchildren’s physical strength and the relation to sport affected full school life, and the concrete contents for leading a school life suitable for the level of physical strength and an athletic ability became clear.
- (2) The correlation between “physical strength and an athletic ability” and the “The degree of a fulfillment in school life” became clear.
- (3) Moreover, in order for schoolchildren to lead a better school life, the important point of increasing physical strength and athletic ability was suggested.

For the next study, even if physical strength and an athletic ability make a difference, the practical method of the improvement in physical strength needs environmental management for leading a full school life.